

# 天理市埋蔵文化財調査概報

(平成5年度・国庫補助調査)

長寺遺跡 (第10次)

平等坊・岩室遺跡 (第13次)

1994

天理市教育委員会

## 例 言

- 1、本概報は、天理市教育委員会が平成5年度に実施した国庫補助による埋蔵文化財調査の概要である。
- 2、本概報には長寺遺跡（第10次調査）と、平等坊・岩室遺跡（第13次調査）について報告を行った。
- 3、発掘調査は松本洋明が担当し、調査補助にいたっては下記の方々から協力を得た。  
名倉 聡（花園大学OB） 西村匡広（花園大学4回生） 藤藪一悦（花園大学2回生）  
清水勝則（花園大学2回生）
- 4、長寺遺跡の第4・7・8・10次調査で検出した粘土のサンプルから花粉と種実、寄生虫卵について、天理大学附属天理参考館、金原正明氏に分析を依頼し、同遺跡の環境面について報告を行った。
- 5、本概報の調査報告と図面作製、編集は松本洋明が行った。

## 長寺遺跡（第10次調査）

場所、天理市樺本町

調査期間、平成5年5月24日～7月26日

担当者、天理市教育委員会、松本洋明

宅地建築予定地の東半部に、幅7m、長さ20mの調査区を南北に設定した。その結果、弥生中期～古墳時代前期、奈良～鎌倉時代にかけての遺構を検出した。

### （1）弥生中期後半

南東から北西方向に流れる幅20m以上の谷筋地形を検出した(図5)。落ち込みは時代によって深さが変化する。弥生時代中期の段階では、2mほどの落差がある。図2の断面では弥生中期までのを示しているが地形は弥生時代以前から形成されている。谷筋地形に堆積した砂礫層から中期後半(大和第Ⅲ・Ⅳ様式)にかけての土器類が出土している。また谷筋の兩岸に土器片を含む包含層があり、谷筋地形を挟んで兩岸の尾根筋地形に弥生時代中期後半の集落が立地しているものと推測される。流路の北岸斜面には径5mほど、深さ3.5mのSE-2井戸遺構を検出した。井戸から大和第Ⅲ-4様式にかけての土器類や木製鏝の未成品1点(図版1)が出土している。また井戸底からは成人女性の骨格(大和第Ⅲ様式後半)が出土している。人骨は頭部から胴部上半まで骨格がそろい、出土状態は頭部を下にして逆さまに転落した状態であった。(SE-2出土の人骨と遺物類については、別途で報告したい。)

### （2）弥生時代末～古墳時代前期

谷筋地形が弥生時代中期に比べて浅くなり、1mほどの落差で谷筋状の流路を検出した(図5)。自然流路の北岸には、流路から引き込み溝を取り込んだ長さ10m、幅7m、深さ1mの大形土坑1があり、庄内期の土器類が完形品でまとまって出土している(図4)。また流路の砂礫層からも庄内期の土器破片が多く出土し(図3)、布留期には流路が粘土の堆積によって大形土坑1とともに埋没していく。

### （3）奈良～鎌倉時代

調査区で検出した谷筋地形の埋没が進み、地形の起伏が小さくなった奈良時代には柱穴を伴う建物遺構-1・2が出現する。いずれも北東方向に柱が並び、ともなって奈良時代の土器類が出土している。建物遺構の特徴や性格は定かでないが、調査区の中央部で検出したSD-07溝が谷筋に沿う状態で北西方向に流れている。調査地点から東方100mには長寺遺跡の寺跡があり、時期的には建物遺構との関わりが推測される。なお深さ60cm、径60cmのSE-1を検出している。自然石と奈良時代の平瓦を枠組に転用した遺構で、付近

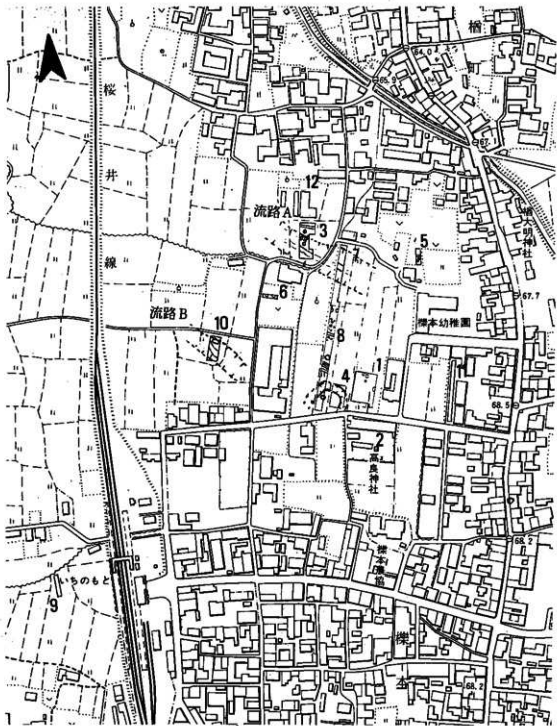
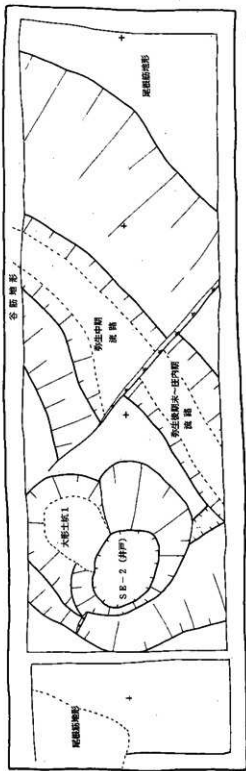
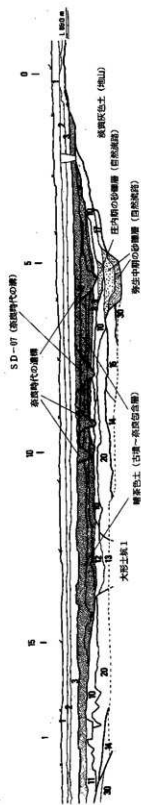


図1 長寺遺跡の調査地点 (S1/2500)

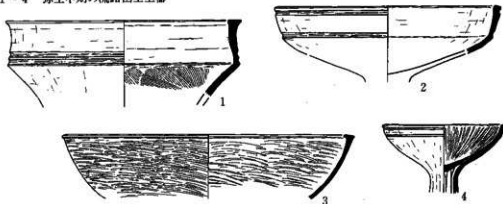
1～12調査次数を表す



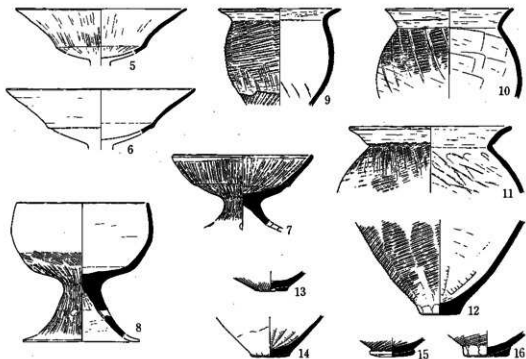
1. 雑沓色土 (粘土)
2. 雑沓色土 (粘土)
3. 灰褐色土
4. 雑沓色土 (粘土)
5. 雑沓色土 (粘土)
6. 雑沓色土 (粘土)
7. 雑沓色土 (粘土)
8. 雑沓色土 (粘土)
9. 雑沓色土 (粘土)
10. 雑沓色土 (粘土)
11. 雑沓色土 (粘土)
12. 雑沓色土 (粘土)
13. 雑沓色土 (粘土)
14. 雑沓色土 (粘土)
15. 雑沓色土 (粘土)
16. 雑沓色土 (粘土)
17. 雑沓色土 (粘土)
18. 雑沓色土 (粘土)
19. 雑沓色土 (粘土)
20. 雑沓色土 (粘土)
21. 雑沓色土 (粘土)
22. 雑沓色土 (粘土)
23. 雑沓色土 (粘土)
24. 雑沓色土 (粘土)
25. 雑沓色土 (粘土)
26. 雑沓色土 (粘土)
27. 雑沓色土 (粘土)
28. 雑沓色土 (粘土)
29. 雑沓色土 (粘土)
30. 雑沓色土 (粘土)

図2 調査区平・断面図

1-4 弥生中期の流路出土土器



5-16 庄内期の北岸出土土器



17-19 庄内期の流路出土土器



図3 自然流路出土土器 (谷筋地形) S Ⅳ



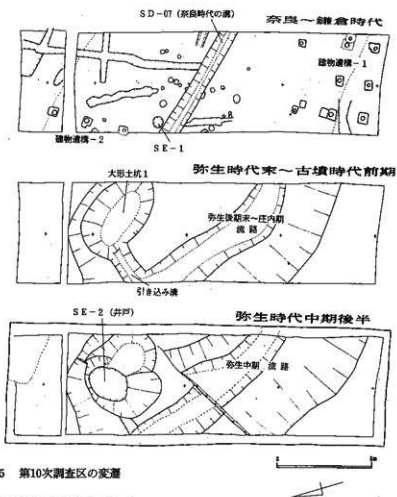


図5 第10次調査区の変遷

から瓦器碗の破片が出土している。

#### (4) まとめ

第10次の調査地点には北西方向に延びる谷筋地形（図1－流路B）があり、弥生時代以前から古墳時代にかけて流れを形成していた。長寺遺跡では、すでに第3・7次調査でも谷筋地形（図1－流路A）を検出している。長寺遺跡の弥生集落は、こうした複数の谷筋を取り込みながら尾根筋上の土地に居住地が立地していたものと推測される。特に第10次調査地点では庄内期の土器類が目立ち、流路Bに沿って古墳時代初頭の遺構が集中していたのかもしれない。流路Bの北側に沿った第4・8次調査地点では、庄内期的大型墳丘墓を検出している。また第3・7次調査で検出した流路Aには、弥生時代中期の包含層の直上に古墳時代前期（布留期）の包含層が堆積し、その間の弥生時代後期の包含層がない。今回の第10次調査で検出した流路Bでも弥生時代中期の包含層につづいて古墳時代初頭（庄内期）が関わり、流路Aと同様に弥生時代後期の痕跡が認められず、長寺遺跡では弥生時代中期と古墳時代前期との間に集落の断絶がある。長寺遺跡の東方1kmには高地性集落で知られる弥生時代後期の東大寺山遺跡があり、同遺跡との関係が興味深い。



## 平等坊・岩室遺跡（第13次調査）

調査地点、天理市岩室町

調査期間、平成5年11月8日～12月28日

担当者、天理市教育委員会・松本洋明

宅地造成の予定地において幅4m、長さ50mの調査区を南北に設定し、部分的に拡張調査を実施した。調査の結果、弥生時代前期から後期にかけておびただしい遺構を検出した。

### （1）基本土層と地形（図7）

黒灰色粘土（図7-7）を基盤にして、その直上には淡黄灰色細砂層がある。調査は淡黄灰色細砂層をベースにして遺構を検出している。調査区の北半部から0～15m地点までは、淡黄灰色細砂層の上面に暗茶色土の弥生土器のみを含む包含層があり、遺構の残りも良好であったが、包含層をベースにした遺構の検出が極めて難しく淡黄灰色細砂層まで手掘りで下げた。調査区の南半部では攪乱が入り、包含層の残りが悪い。地形は北方から南方に向かって基盤層が徐々に傾斜する微高地で、弥生前期の大型土坑（SX-10・11、SK-110）が地盤の高い北方に集中していた（図8）。なお、おびただしい土器量であるため遺構の詳しい状況が判明していない。本報告で明らかにしたい。

### （2）弥生前期（図8）

調査区全面にわたって遺構が出土している。調査区の北方では前期前半の大型土坑（SK-110、SX-10・10N、11）が切り合いながら集中している。土器の出土量は少ない。SX-11は東西に長い幅2.5mの木器貯蔵穴で、鉄の未成品が出土している。大型土坑は前期後半（SX-11N）まで掘り込まれているが、前期前半に集中し、前期末～中期初頭には（SK-01・06・07）土坑が小型になる（なお13次調査で出土した前期末の条痕文系土器については、大和弥生文化の会・みずほ12号で別途報告している）。前期後半には幅4m、深さ1mほどのSD-10大溝を調査区の南半部で検出している。溝内から大和第I-2様式（前期中段階・後半）、唐古・鍵遺跡20次調査のSK-215に併行する土器が多量に出土している（図10～12）。SD-10は第5次調査で確認したSD-15に対応する可能性がある。調査区の東側に隣接する第7次調査区では弥生前期にかけておびただしい砂礫層が伴う落ち込み（自然流路）があり、流路と微高地との境目に掘り込まれた集落を囲む溝かもしれない。土器の実測図ではSD-10のほかにも調査区の中央部で検出した土坑（土器溜まり土坑）の資料も実測した（図13）。時期的にはSD-10より古く唐古・鍵遺跡20次調査のSK-205に類例が求められ、大和第I-1様式末から大和第I-2様式初頭の資料と思われる。

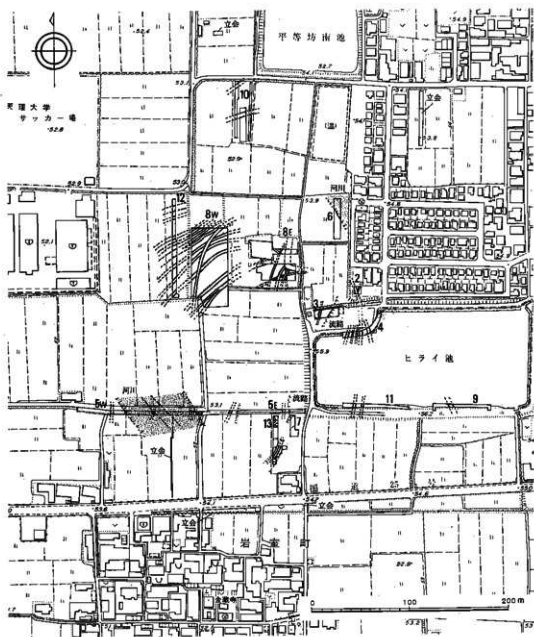
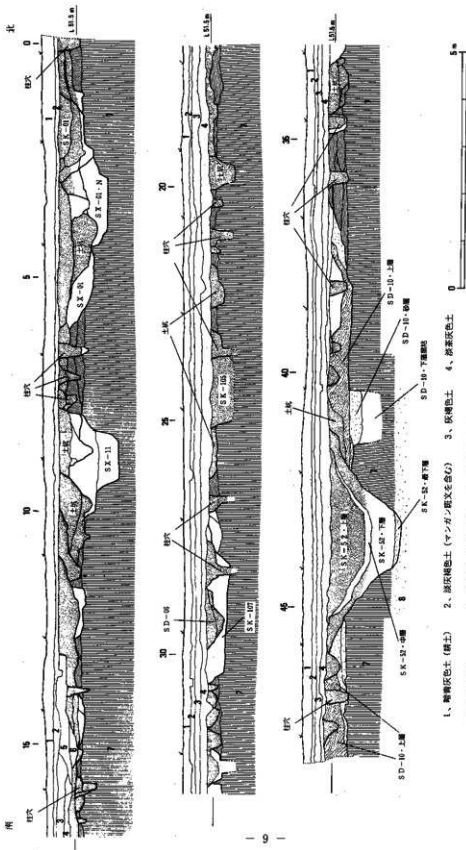


図6 平等坊・岩室遺跡調査地点図  
1～13調査次数を表す



調査区土層図

- 1、暗褐色土 (暗土)
- 2、淡灰褐色土 (マンガノ層を含む)
- 3、灰褐色土
- 4、淡灰褐色土
- 5、淡褐色土
- 6、赤褐色土 (黄腐り層)
- 7、黒灰褐色土 (腐層)
- 8、灰褐色砂層
- 9、淡灰褐色砂・腐層 (一層で砂層も含む)
- 10、暗褐色土・腐層 (腐層も含む)

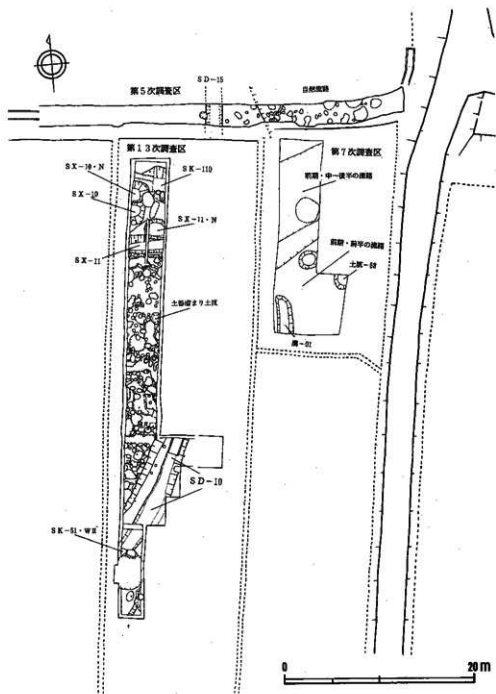


図8 調査区平面図(下部遺構)

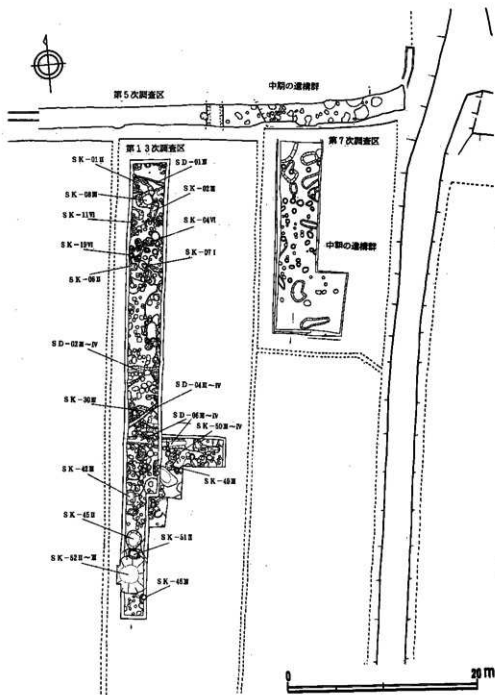


図9 調査区平面図

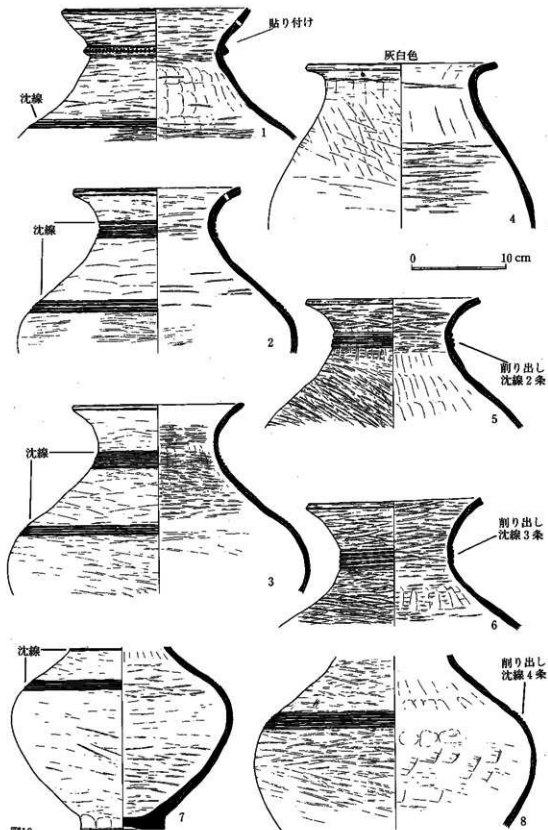


图10

SD-10 中層出土土器 (SⅣ)

No.4, 11, 13 色調灰白色 搬入土器

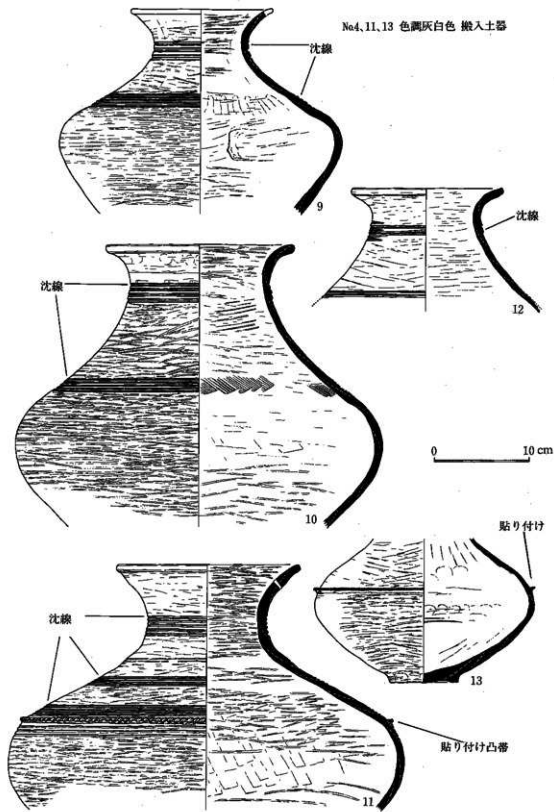


図11

SD-10 中層出土土器 (S 4)

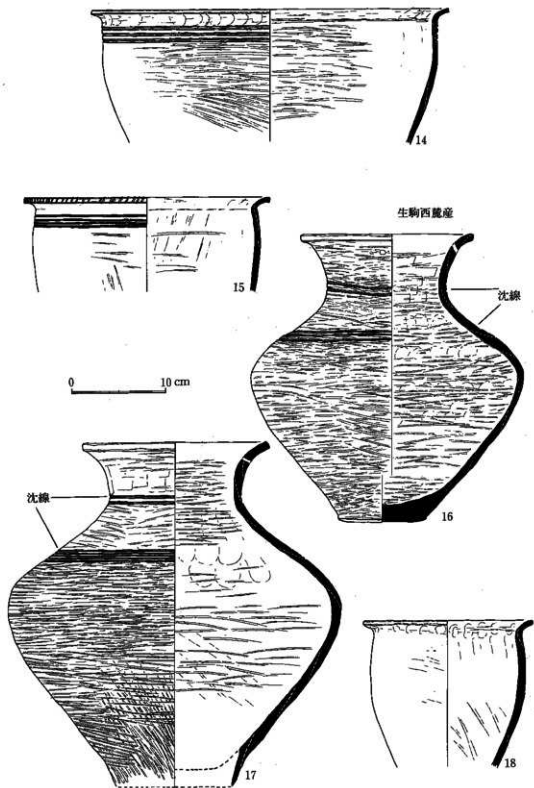


圖12

SD-10 中層出土土器 (SⅣ)



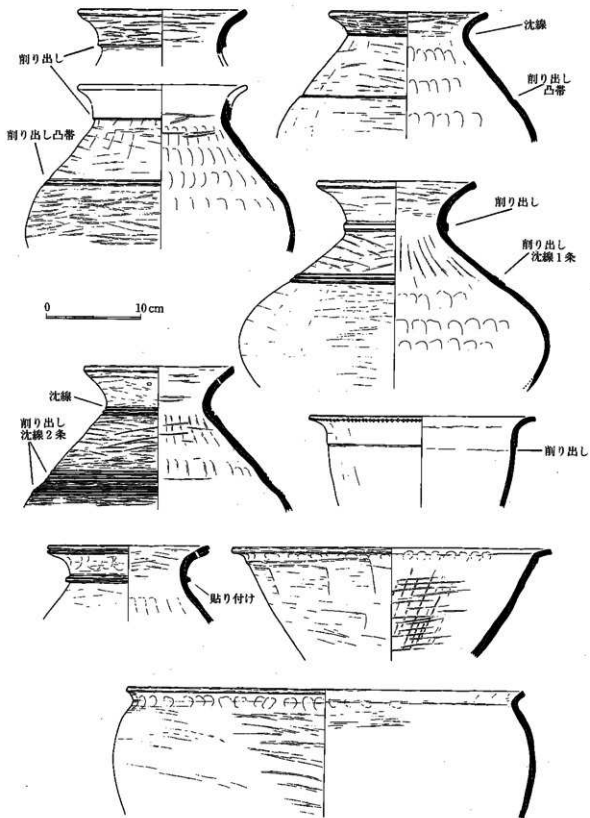


図13

土器溜まり土坑出土土器

### (3) 弥生中期～後期 (図9)

第7次調査区では前期末～中期初頭になると自然流路がなくなり、変わって微高地が形成されて柱穴や土坑が目立つ。第13次調査区でも前期末以降、中期から後期にかけて柱穴や土坑が際立つ。この時期になると環濠にあたる大溝はさらに東方で区画され (図6・第11次調査区)、調査地点は環濠で区画された内部に取り込まれる。おびただしい柱穴は竪穴住居や建物遺構と推測される。しかし、どの時期の遺構がどのように存在していたのか定かでない。本報告で明らかにしたい。なお調査区の北半部ではSK-04を灯としたSK-11・19で区画する柱穴があり、後期後半の方形住居1棟が推測できる。SD-10に重複してSK-51 (大和第II-3様式)、SK-52 (第II～III様式) の井戸遺構を検出している。SK-52はSK-51を切った径5m、深さ1.5mのすり鉢状に掘り込まれた大型の井戸遺構で、銅鏝の破片が出土している (銅鏝については、別途で報告したい)。第13次調査では中期 (大和第III～IV様式) の土器類が豊富で、後期の資料は調査区の北半部から出土しているがあまり目立たない。数点であるが包含層から庄内期の土器片も出土している。

# 長寺遺跡における自然科学的分析

天理大学附属天理参考館 金原正明・古環境研究所 金原正子・中村亮仁

## 1. はじめに

長寺遺跡第4次・第7次・第8次・第10次調査採取の堆積土について、花粉分析・寄生虫卵分析・種実同定を行った。以下調査担当者から教示も含め記載・結果・考察を行う。なお、長寺遺跡の分析では奈良県天理市樫本周辺の植生・環境・農耕の変遷が部分的ながら明らかとなった。

## 2. 試料

花粉分析・寄生虫卵分析用試料は以下の30層準である。第4次調査では長寺1号墳周濠の堆積物を15試料採取した。下位のII層・III層(4-9~15)は泥炭質の粘土層で、庄内期の堆積物である。上位の4-1~3はシルトで、9・10世紀の堆積物である。長寺廃寺の寺域内にあたる。第7次調査ではSX-01(池状)の平安時代の庭池遺構の上層(7-1)と下層(7-2)であり、10・11世紀の堆積物である。ここは寺域外である。第8次調査では北溝(SD-06、8-1~3)と南溝(SD-08、8-4~6)で、長寺廃寺の北辺境界溝にあたる。第10次調査ではSE-1(12・13世紀)のIII層(10-1)、大型土坑内(庄内期)の粘土層(II層・III層・IV層、10-2~4)、下層井戸SE-2(弥生時代中期後半)のIV層(10-5)・9層下(10-6)、谷筋地形の堆積の最下層の粘土(13層、10-7、弥生時代中期後半)である。

種実同定には第4次調査長寺1号墳周濠の下層(庄内期)のII層の上・下、III層、SE-1(12・13世紀)のIII層、大型土坑内(庄内期)の粘土層(II層・III層・IV層、10-2~4)、下層井戸SE-2(弥生時代中期後半)の9層下、谷筋地形の堆積の最下層の粘土(13層、弥生時代中期後半)を用いた。

## 3. 方法

花粉分析は水酸化カリウム、フッ化水素処理、アセトリシス処理の各処理を施して分離抽出しプレパラートを作成した。生物顕微鏡で計数を行い、寄生虫卵はその過程で出現するものを計数した。寄生虫卵の多い試料は改めて処理計算を行い糞便堆積物の分析を行うこととした。

種実同定は100ccの試料を0.25mmの篩で水洗し、実体顕微鏡を用いて同定と計数を行った。

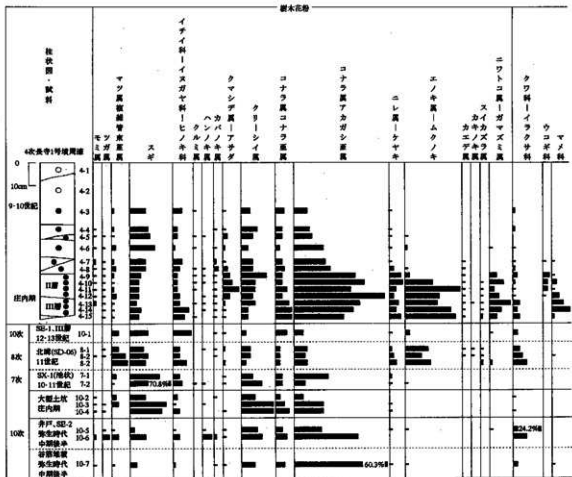


図14 花粉の組成

#### 4. 結果と考察

結果は一覧表と主要組成図にして示した。花粉総数が200に満たない試料でも100以上のものは組成図に示した。

第4次調査では長寺1号墳周濠の堆積物の中位と下位から多くの花粉が検出された。最下の4-15では草本花粉ではヨモギ属が多く、樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属・エノキ属・ムクノキが多い。他にニワトコ属・ガマズミ属も特徴的に出現する。ヨモギ属は改変された乾燥地を好み、エノキ属・ムクノキ（ここではエノキとみなされる）やニワトコ属・ガマズミ属（ここではニワトコとみなされる）は改変地にいち早く入り込む樹木であり、古墳築造に伴う植生の遷移によって二次的な途中の樹木などが増加している。周濠は深い池状を呈していたと推定される。III層からII層（4-9-15）にかけては、草本花粉ではヨモギ層が低率となりガマ属・ミクリ属・サジモダカ属・オモダカ属などが増加し、樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属がやや増加しエノキ属・ムクノキは減少傾向を示す。ニ



遷を追う。第10次調査の谷筋地形の堆積の最下層の粘土(13層、10-7)では樹木花粉が多く、コナラ属アカガシ亜属(カシ類)を主とする照葉樹林が比較的多く分布していたと推定される。下層井戸SE-2のIV層(10-5)9層下(10-6)ではカナムグラ属を多く含むクワ科-イラクサ科が高率であり、雑草の多い開地であった。遺跡の周囲には近接して大規模な水田は存在していなかったと推定される。種実では弥生時代中期後半から少ないながらも食用となるキイチゴ属やマタタビ属が含まれている。

大型土坑内(10-2~4)では、ヨモギ属とイネ科の草本花粉がやや多く、樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が出現するもののスギやクレーシイ属なども多い。このことから、庄内期は改変地が多くそれを好むヨモギ属が繁茂し、コナラ属アカガシ亜属(カシ類)が大きく減少している。第4次調査の長寺1号墳にみられるように古墳築造などの大規模な土地改変が周辺で行われていたようだ。近接しているこの長寺1号墳の周濠下部とは分析結果がやや異なるが、狭い独立した堆積域であるため極めて狭い範囲の植生を強く反映したものと考えられる。

第7次調査ではSX-01(池状)では下層(7-2)で樹木花粉のスギが70.8%と極めて高率に出現する。近接する植生を強く反映していると考えられ、この平安時代(10-11世紀)の庭池遺構に近接してスギが生えていたようだ。これはスギ林というような樹林を形成していたのではなく、孤立木の状態が少量分布していたと考えられる。

第8次調査では南溝(SD-08、8-4~6)からほとんど花粉が検出されなかった。南溝は乾燥化していたか堆積速度が速かったものとみられる。北溝(SD-06、8-1~3)では草本花粉が多くイネ科が高率でヨモギ属・アカザ科-ヒユ科などが上位に向かって増加し加えてソバ属が出現する。ソバ属は花粉が反映されにくい植物であるため大きく評価され、またヨモギ属・アカザ科-ヒユ科は改変地、特に畑に多い人里植物でもある。北溝の埋没する11世紀には周囲でソバ属などの畑作が営まれていたとみなされる。樹木花粉ではエノキ属-ムクノキ属がやや多く、スギ・コナラ属アカガシ亜属などが少し出現している。エノキ属-ムクノキ(ここではエノキ)が近くに生育していたとみなされる。他にカキノキ属の花粉が見いだされ、近くに生えていた。

第10次調査のSE-1(12-13世紀)のIII層(10-1)では草本花粉が樹木花粉より多い。イネ科・アカザ科-ヒユ科・ヨモギ属・カヤツリグサ科が多く、ソバ属も出現しているため、周辺で畑が営まれていたとみなされる。

寄生虫卵はいくつかの試料で少量検出されているが、汚染の範囲内である。弥生時代中期後半の谷筋地形の堆積ではやや多い。肉食獣(イヌ・ネコなど)に寄生するマンソン裂頭条虫も検出された。

奈良盆地や近畿地方の植生・環境・農耕の変遷は、たとえば金原(1993)などに大まか

にまとめられているが、局地的な変遷はまだまだわかりえてない。本遺跡では平安時代から中世前半にかけてもマツ属復雑管束亜属（アカマツ・クロマツ）の増加はみられず、そして水田が大ききは営まれてはいない。これらは局地的な変化と考えられる。

第4次調査の長寺1号墳周濠の庄内期にあたるII層・III層（泥炭質粘土層）の現地取り上げ試料にモモ（*Prunus persica* Batsch.）核（内果皮）が26個が含まれていた。いずれも先端が尖らず表面がなめらかでやや丸いもので、金原・粉川（1992）がA類としたものである。弥生時代から布留期にかけてはA類のモモ核しか出現しない。長さの平均値は26.45 mmもあり、和爾遺跡などより極めて大型である。長さ/幅、長さ/厚さ、幅/厚さの平均値は和爾遺跡のA類とほぼ一致する。本遺跡でも他の類のモモ核は出土していない。

## 5. まとめ

以下に推定される長寺遺跡およびその周辺の植生と環境を時代順にまとめる。

- 1) 弥生時代中期後半：長寺遺跡ではコナラ属アカガシ亜属（カシ類）を主とする照葉樹林が比較的多く分布していた。下層井戸SE-2の周辺にはカナムグラ属などの雑草の多い開地が分布する。なお、遺跡の周囲には近接して大規模な水田は存在していなかったと推定される。
- 2) 庄内期：改変地が多くそれを好むヨモギ属が繁茂する。コナラ属アカガシ亜属（カシ類）が大きく減少し開地が多い。長寺1号墳では古墳築造に伴って、乾燥した改変地を好むヨモギ属、エノキ属—ムクノキ（ここではエノキとみなされる）やニワトコ属—ガマズミ属（ここではニワトコとみなされる）が繁茂していた。周濠は下位では池状であるが、中位にかけてミクリ属・サジオモグカ属・オモグカ属の草本の繁茂する浅い水湿地となる。経過とともにコナラ属アカガシ亜属が増加しエノキ属—ムクノキは減少し、照葉樹の多い状態に遷移する。
- 3) 9・10世紀：イネ科やヨモギ属の繁茂するやや乾燥した開地が広がる。
- 4) 10・11世紀：第7次調査のSX-01（池状）の庭池遺構に近接してスギが孤立木か少数分布の状態では生えていた。
- 5) 11世紀：南溝は乾燥化していたか堆積速度が速かった。北溝の周囲ではソバ属などの畑作が営まれていた。エノキ属—ムクノキ（ここではエノキ）が近くに孤立木か少数分布の状態では生育していた。
- 6) 12・13世紀：ソバ属などの畑が遺跡周辺で営まれていた。大きく開けた景観であった。





学名	分類群	和名	部位	4次		10次 (客生時代中期後半)							
				長寺1号墳周縁		SB-1	大塚土坑(正内期)		下層丹戸SB-2		谷地型		
				II層上	II層下	III層	IV層	III層	IV層	III層	IV層9層(下)	13層	
arbor		木本											
<i>Carpinus latiflora</i> Blume		アカシデ	果実		2								
<i>Morus</i>		クワ属	種子	1	1								
<i>Rubus</i>		キイチゴ属	核	1						2	1		
<i>Phellodendron amurense</i> Rupr.		キハダ	種子							1			
<i>Zanthoxylum armatum</i> Sieb. et Zucc.		カラスダシショウ	種子		1								
<i>Ilex chinensis</i> Sims.		ナナミノキ	種子								2		
<i>Actinidia</i>		マダビ属	種子	1	1					1		2	
<i>Artocarpus</i>		ウコギ科	種子	41	1			3	13	34		2	
<i>Sambucus Sieboldiana</i> Blume ex Griseb.		ニワトコ	種子	3	1					1			
herb		草本											
<i>Sparganium</i>		ミクリ属	果実	66	17								
<i>Alismaceae</i>		オモダカ科	種子	313	1								
<i>Gramineae</i>		イネ科	属							3			
<i>Carex</i>		スグ属	果実	1									
<i>Cyperaceae</i>		カヤツリグサ科	果実	34	1						2	1	
<i>Monochoria vaginalis</i> Presl		コナギ	種子	1									
<i>Urticaceae</i>		イラクサ科	果実		1								
<i>Polygonum</i>		タデ属	果実									1	
<i>Chenopodium</i>		アカガ属	種子								2		
<i>Chenopodium</i>		ヒユ属	種子								3	1	
<i>Caryophyllaceae</i>		ナデシコ科	種子							1	1		
<i>Cruciferae</i>		アブラナ科	種子									1	
<i>Oxalis</i>		カタバミ属	種子							1	3		
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i> Thunb.		ノブドウ	種子	2	1								
<i>Solanaceae</i>		ナス科	種子	1							1	1	
<i>Chenopium meibii</i> L.		ケリ属	種子							1			
Total		合計		461	31	1	0	0	3	13	48	11	10
Unknown		不明		32	15	0	0	0	0	0	2	0	1

図17 表2 出土種実一覧

遺構・層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	長さ/幅	長さ/厚さ	幅/厚さ
自然流路2区 下層II~III	29.75	23.35	19.85	1.27	1.50	1.18
	24.70	22.15	15.20	1.12	1.63	1.46
	25.15	21.55	16.35	1.17	1.54	1.32
	25.80	24.00	20.15	1.08	1.28	1.19
	25.30	21.50	17.35	1.18	1.46	1.24
	25.25	22.25	19.60	1.13	1.29	1.14
	28.85	23.40	18.85	1.23	1.53	1.24
	27.50	22.50	18.55	1.22	1.48	1.21
	26.55	23.35	18.25	1.14	1.45	1.28
	25.40	24.10	18.05	1.05	1.41	1.34
	26.85	23.35	18.55	1.15	1.45	1.26
	26.85	25.70	21.50	1.04	1.25	1.20
	28.25	21.45	16.75	1.32	1.69	1.28
	27.30	21.15	16.40	1.29	1.66	1.29
22.75	19.85	16.50	1.15	1.38	1.20	
28.25	21.70	18.55	1.30	1.52	1.17	
23.60	22.65	18.20	1.04	1.30	1.24	
24.90	22.85	17.90	1.09	1.39	1.28	
31.65	23.90	20.20	1.32	1.57	1.18	
27.25	22.15	17.45	1.23	1.56	1.27	
26.55	24.40	18.65	1.09	1.42	1.31	
23.65	20.55	16.60	1.15	1.42	1.24	
28.25	24.15	18.90	1.17	1.49	1.28	
22.75	20.95	16.70	1.09	1.36	1.25	
27.90	23.55	18.90	1.18	1.48	1.25	
26.75	25.15	18.20	1.06	1.47	1.38	
平均値	26.45	22.76	18.16	1.16	1.46	1.26

図18 表3 モモ核計測値

7) 庄内期出土のモモ核は、先端があまり尖らず表面がなめらかで丸いものばかりであった。

#### 参考文献

中村純 (1981) 「農耕史の花粉分析学的研究」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学昭和55年度年次報告書』

金原正明 (1993) 「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法』角川書店

金原正明・粉川昭平 (1992) 「モモ核を中心とする古代の有用植物の変遷」『日本古代文化財学会第9回大会研究発表要旨集』

金原正明・金原正子・粉川昭平 (1990) 「和爾遺跡出土種実と花粉分析」『和爾・森本遺跡第5次発掘調査報告』(奈良県遺跡調査概報 1989年度)



SE-1 井戸遺構  
(中世)



SE-2 出土の  
木製鎌未製品  
(弥生中期後半)



SE-2 底面から出土した  
頭蓋骨の出土状態  
(弥生中期後半)



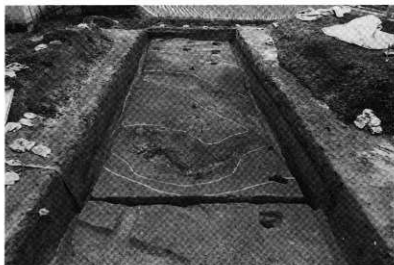
奈良・鎌倉時代  
SD-07とSE-1



奈良・鎌倉時代の遺構と  
自然流路の検出



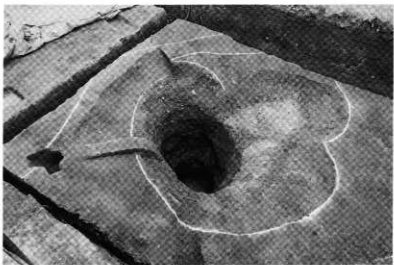
奈良・鎌倉時代  
建物遺構と柱穴



弥生時代末～  
古墳時代前期



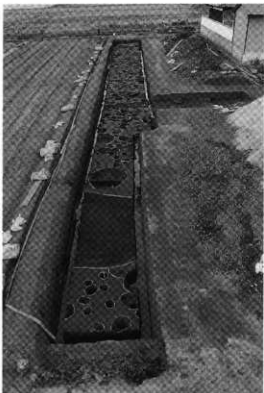
弥生時代・中層後半



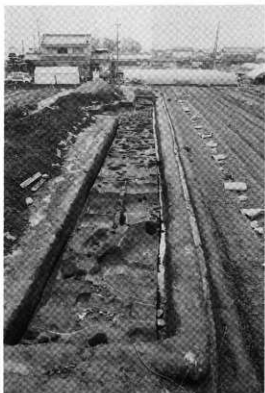
SE-2 井戸



(北方から)



(南方から)



下部遺構の検出 (北方から)



SD-10とSK-52 大影井戸 (南方から)



SD-10  
弥生前期の大溝  
(北方から)



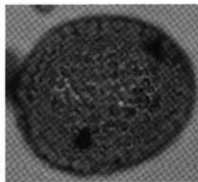
SD-10 (南方から)



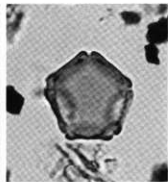
SK-52 大形井戸  
弥生中期中葉  
(北方から)



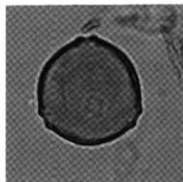
1 スギ



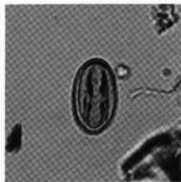
2 コウヤマキ



3 ハンノキ属



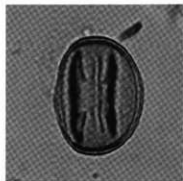
4 クマシデ属-アサダ



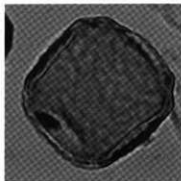
5 クリーシイ属



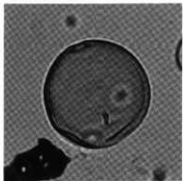
6 コナラ属コナラ亜属



7 コナラ属アカガシ亜属



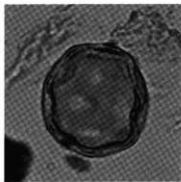
8 ニレ属-ケヤキ



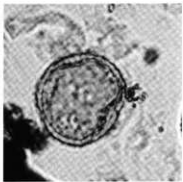
9 エノキ属-ムクノキ



10 クワ科-イラクサ科



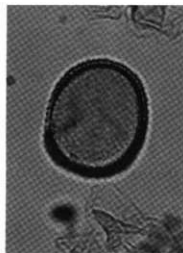
11 サジオモダカ属



12 オモダカ属

30μm





1 ガマ属—ミクリ属



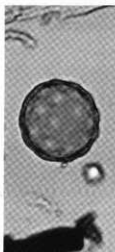
2 イネ科



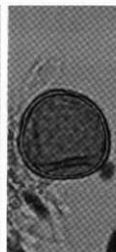
3 イネ属型



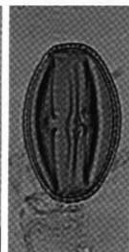
4 ソバ属



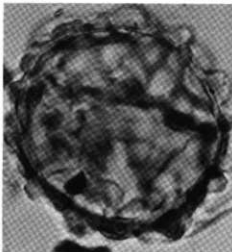
5 アカザ科—ヒユ科



6 オオバコ属



7 ノブドウ属



8 回虫卵



9 鞭虫卵



10 マンソン裂頭条虫卵

30μm



1a モモ核



1b 同左



2a モモ核



2b 同左



3 モモ核



4a モモ核



4b 同左



5a モモ核



5b 同左

— 5mm



6 アカシア果実

— 0.2mm



7 クワ属種子

— 0.2mm



8 キイチゴ属核

— 0.1mm



9 マタタビ属種子

— 0.1mm



10 ニフトコ種子

— 0.2mm



11 ウコギ種子

— 0.2mm



12 ミクリ属果実

— 0.2mm



13 オモダガ科種子

— 0.1mm



14 スゲ属果実

— 0.2mm



15 カヤツリグサ科果実

— 0.1mm



16 コナギ種子

— 0.1mm



17 アカザ属種子

— 0.1mm



18 ヒユ属種子

— 0.1mm



19 ノブドウ種子

— 0.2mm



— 0.2mm



20 ウリ類種子

— 1mm

平成6年3月

天理市埋蔵文化財調査概報

長寺遺跡(第10次)

平等坊・岩室遺跡(第13次)

発行 天理市教育委員会  
編集 天理市川原城町605番地

印刷 天理時報社  
天理市稲葉町80番地